

國學院大學学術情報リポジトリ

〔談話室〕インターネットと無神論：
デジタル時代における「カミング・アウト」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ヘイヴンズ, ノルマン, Havens, Norman メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000548

インターネットと無神論

— デジタル時代における「カミング・アウト」 —

ヘイヴンズ・ノルマン

フランスの歴史家リュシアン・フェーヴルによると、ヨーロッパの古代から中世までのあいだには無神論は想像もできない概念だったという。当時の人々にとって神の存在は「宗教」だけではなく、人生のあらゆる領域に深く根を下ろした信念であった。この事情は18世紀の啓蒙思潮とともに幾分和らいだが、無神論者に対する差別は現在でもなくなっていない。日本人にとって想像しにくいかもしれないが、アメリカの無神論者に投げかけられるもつとも重大な罪状は、キリスト教の倫理道徳との関係にある。キリスト教から見ると、倫理道徳の効力は神（ゴッド）の存在（と死後の罰に対する恐怖）にもとづいているので、ゴッドが存在しなければ、死後の罰の脅威も存在しない。すると、無神論者は社会的倫理に従う理由がない、もつともアノミックな人々に違いない、というレッテルが貼られる。自分が無神論者だということが公表されれば、仕事その他の社会的待遇や威信を失う可能性があるもので、依然として自分の信念を隠す人も多い。

この歴史を背景として、新世紀が始まった頃に、無神論に対する差別に真っ向から抵抗する運動があらわれた。「新無神論」と呼ばれるもので、その主役を演じたのは「新無神論の四騎士」(The Four Horsemen of New Atheism)とも呼ばれるリチャード・ドーキンス (R. Dawkins) 、ダニエル・デネット (D. Dennett) 、サム・ハリス (S. Harris) 、クリストファー・ヒッチنز (C. Hitchens) である。ヒッチنزは2011年に死去したが、残っている3人と他の賛同者は活動を現在も続けている。新無神論の「新」は、その「広範な政治活動」と「啓蒙思潮にもとづいている理性

とポスト・モダンのテーマと関心の組み合わせ」だと言われているが、もうひとつの特徴は運動の積極的態度だといえる。多くの宗教者との公開討論会や数々の刊行物によりその影響を広めると同時に、その「耳ざわり」的な過激なスタンスのためにかなり激しい批判も招く。

しかし、私にとって、新無神論のもっとも興味をそそるところはインターネットとの関係である。インターネットが生まれたのと同じ頃、社会学では「Neotribalism」（ネオ・トライバリズム…新部族主義）という概念が注目されるようになった。従来の「トップダウン」の共同体モデルが空洞化すると、「ボトムアップ」という個々人の自由選択によって構成するさまざまな境界線がない共同体が可能になると、楽観的に論じられた。理論的に言えば、こうした部族主義という現象はインターネットのソーシャル・メディアとネットワーキングとは無関係であったが、後者の急激な興隆と社会への浸透は必然的に「デジタル・トライバリズム」を促進する効果になったといえる。この新部族主義と新無神論との関係は特にユーチューブ（Youtube）が現れた2005年から顕著となったといえる。例えば2007年には、上記の「新無神論の四騎士」という論者は4人対話を開催して、無神論と宗教について2時間話した。その録画ビデオがユーチューブにアップされたところ、多くの反響を呼んで、その頃から現れた新しい無神論関係ユーチューブ・チャンネルの刺激になった可能性が大きい。直接的な因果関係を示すものではないが、2017年の宗教研究の学術誌にはインターネットと宗教をとりあげる調査研究が発表され、著者の結論は、インターネットの利用が増えるにつれ特定の宗教に対する信仰が減ることであった。確か、この結果はインターネット利用全般に対するもので、無神論関係のサイト利用が特定されなかったようだから、ネオトライバリズムの一端として社会全体の宗教性や無神論に対する以前の態度の変化につながるかどうか、分からない要素が多いが、見守っていくべき現象だといえる。

（宗教学・民間信仰、神道と環境問題）